

草の根エコ運動の現状と課題

——立正佼成会の環境配慮活動——

深田 伊佐夫

一九八〇年代前半を境に、ヒトを取り巻くさまざまな圏域で発生する環境問題への問題意識が高まり、政治・経済・技術・資源・エネルギー・文化など、社会の各分野からの取り組みが行われるようになってきた(二十一世紀警告委員会…一九九七、電力中央研究所…一九九八、西川…二〇〇二、産経新聞東京社会部…二〇〇七)。

同時に、社会の各分野と並び、宗教界からの環境問題に対する問題意識も高まり、諸宗教の宗教的価値観を背景とした環境倫理の提唱と啓発(溝口ら…二〇〇六)、自宗教の教義と信条に基づく環境問題への具体的な行動を展開する(谷口ら…二〇一〇)などの方向性が確認できるようになってきた。

さらに、二〇一〇年には有識者と宗教者により「宗教・研究者エコイニシアティブ」が結成され、同年十一月の第一回シンポジウム開催を契機に、宗教界の環境問題に対する具体的な啓発活動が展開され始めた。

教団単位の動向では、聖教新聞社(創価学会内部組織)・生長の家・立正佼成会・霊友会が、ISO14001の認証を受け、教団の環境倫理確立、法人組織の環境経営の促進、自教団の環境活動の体系化と、環境方針の内外への宣言が行われた。

こうした、宗教界からの環境問題への取り組みは、宗教社会学的な視点(井上ら…一九九四、稲場ら…二〇〇九)からみれ

ば、宗教者・教団の果たす社会貢献活動に内包される活動として位置づけられる。

そして、政治・経済などの社会の各分野からの主な取り組みが社会構造・社会制度の改革、技術面の開発を志向しているのに対し、宗教界のそれは人間の意識改革と、諸宗教が歴史的に継承してきた宗教倫理を、環境場面で実践することに重きを置く性格を有す(深田…二〇一〇)。また、前者が比較的規模の大きい行政・企業レベルを対象とした活動であるのに対して、後者は個々の人間を対象とした宗教倫理の啓発と実践が中心であり、いわば草の根レベルでの環境活動であるとも受け止められる。

環境問題の本質的な解決を図って行く上では、社会の各分野と社会を構成する人間の意識という二つの側面から、環境問題に対する意識と行動の乖離を解消する取り組みが必要である。このことから、人間の心の問題を扱う宗教者・教団が、環境問題の分野で人間の心と意識に関する問題に取り組むことは意義あることであると考えられる。

そこで、本報では、環境問題の本質的な解決に向け、宗教を含む精神的・道徳的側面からの環境問題への取り組みの可能性、社会の中で宗教界が果たす使命と役割、求められる活動展開について考察を試みる。考察は、環境問題への特徴のある取り組みを継続している立正佼成会の環境配慮活動の事例調査を通してすすめる。考察は①草の根エコとしての性格 ②草の根活動としての社会貢献の二点について行い、結言として今後の課題を述べることにしたい。